

日本英語学会第37回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月10日午前)

司会 前田雅子 (西南学院大学)

「Labeling Algorithm に基づく主語・補語倒置の分析」

小林亮哉 (名古屋大学大学院)

本発表は Chomsky (2015[1])における Labeling Algorithm の観点から、英語の主語・補語倒置 (Preposing around Be: PAB) に対して理論的説明を与えることを目的とする。PAB では、形容詞句や分詞句など、本来 be に後続する要素が前置されて文頭に現れる。先行研究(Samko (2014[2]))において、PAB で前置される要素は話題性を持つことが指摘されている。

本発表では、Samko(2014[2])に従い、PAB における be は補部に小節構造を取ると仮定する。この小節構造は主語 DP と前置要素からなる {XP,YP} 構造を形成するため、LA の観点から、どちらかの統語対象が義務的に移動する。PAB においては、話題性を持つ前置要素が SPEC-T へ移動し、C から T へ素性継承された値未付与の話題素性との間で素性共有によるラベル付けを行うと提案する。

最後に、本提案の帰結として PAB 以外の構文に対しても説明が与えられることを示す。

[1] “Problems of Projection: Extensions.” [2] “A Feature-Driven Movement Analysis of English Participle Preposing,” *WCCFL* 31.

「Labeling Algorithm と Copy Deletion」

齋藤章吾 (東北大学大学院)

本発表は、Labeling Algorithm (LA) に基づく Copy Deletion の適用を提案し、コピーの音韻効果の有無を説明する。従来、コピーは削除された場合でも縮約を妨げる音韻効果をもつと提案される一方で、その効果をもつコピーは一部に限られることが指摘されている。本発表は、Chomsky (2013[1], 2015[2])が提案す

る LA を修正し、LA は各コピーを対象にし、ラベル付けの問題を引き起こすコピーは LA が適用される転送の段階より前に削除されると提案する。本提案によると、ラベル付けの問題を引き起こすコピーは、転送より前に削除されることで音韻部門へ写像されないため、音韻効果をもたない。一方、ラベル付けに必要なコピーは、転送までに削除されることなく音韻部門へ写像されるため、音韻効果をもつ。(このコピーは、必要があれば音韻部門で削除される。)本発表は、縮約に対する阻止効果やコピーの具現化の制限などコピーに関する諸音韻効果の有無に説明を与える。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*.

司会 成田広樹 (東海大学)

「ラベル付けの最小探査領域について」

中島崇法 (東北大学)

Chomsky (2013[1], 2015[2])によれば、統辞体は最小探査を通じてラベルを付与される。しかしながら、ラベル付けにおける最小探査の概念は必ずしも明確化されておらず、とりわけ最小探査がどれだけの深さに埋め込まれた主要部を見つけ出せることができるかといった問題は十分に考察されてこなかった。本発表では、ラベル付けのための最小探査領域は狭く制限されており、XP-YP 構造が {X_F, WP}, {Y_F, ZP} の形式を取る場合にのみ X と Y の素性共有を通じてラベル F を提供できると提案する。この帰結として、移動体からの移動の禁止 (凍結効果) や wh 島効果に対して説明が与えられる。また本提案は素性共有による多重指定部構造を排除するため、従来多重指定部を用いて説明されてきた構文の再検討を試みる予定である。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond*, Benjamins.

「ラベリングと自由併合に関する問題と 転写の効果とパラメーター」

内芝慎也 (無所属)

本発表では、近年の極小主義モデル (Chomsky 2013 [1], et seq.) において仮定されている統語操作のひとつである「ラベリング (Labeling)」の計算に「転写 (Transfer)」による効果を取り込み (内芝 2019 [2] : cf. Narita 2012, 2014 [3])、転写の適用にパラメーターを設定することで、「自由併合 (Free Merge)」がもたらす問題に一石を投じることを目的とする。現行の極小主義モデルにおいて、併合という操作は合目的ではなく自由に適用されると仮定されており、「移動 (Move)」と同義とされる「内的併合 (Internal Merge)」も例外ではない。すると、移動が統語計算内で自由に適用できるのであれば、言語は基本的に語順の並び替えが無制限に行えるように設計されているはずであるが、実際には語順の並び替えに関しては言語差があり、語順が固定される英語のような言語が何故存在するのか問題となる。本発表では、英語と語順が比較的自由な日本語を取り上げ、両言語での語順の並び替えに関する言語差が本発表で提案する転写のパラメーターによって説明することが可能なることを論じる。

[1] “Problems of projection.” [2] 言語科学会第21 回国際年次大会口頭発表。 [3] *Endocentric Structuring of Projection-Free Syntax*, Benjamins.

第二室 (11 月 10 日午前)

司会 中村太一 (福井大学)

“What does the Unavailability of Genitive Subject in Naxi Suggest?”

Xue-Ying Hu (Gifu University)

Hideki Maki (Gifu University)

This paper investigates syntactic properties of the Naxi language, one of the 55 officially recognized minority languages in China spoken natively by about 310,000 people, most of whom live in or around Lijiang City Yulong Naxi Autonomous County of Yunnan Province, and

shows (i) that it allows N'-deletion, but (ii) that it does not allow genitive subject. It is then argued (i) that there is not a correlation between the N'-deletability and the availability of genitive subject in languages with prenominal sentential modifiers, and (ii) that the non-availability of genitive subject in the Naxi language is attributed to the fact that the relevant predicate is not in the adnominal form. This in turn suggests the validity of [1]'s Conditions on Genitive Subject Licensing for a variety of languages with prenominal sentential modifiers.

[1] Maki, H., L. Bao, W. Bao and M. Hasebe (2016) “Scrambling and Genitive Subjects in Mongolian,” *English Linguistics* 33, 1–35.

「長距離素性継承を用いたラベル付けと名詞句内部からの抜き出し」

菅野悟 (東京理科大学)

本発表の目的は、素性継承の仕組みを通し、目的語繰り上げ構文、結果構文、小節におけるラベル付け (labeling) に説明を与え、さらに、名詞句内部からの抜き出し現象に適切な説明を与えることである。まず、目的語繰り上げ構文では、繰り上げが随意的 (optional) であると主張される (Lasnik 2001 [1])。この随意性を捉えるため、本発表では長距離の素性継承が可能であると提案する。この結果、繰り上げの随意性は、異なる素性継承の反映となる。同様の随意性が小節においても観察される。また、本発表の分析の妥当性は名詞句内部からの抜き出しからも支持される。make-out のような目的語繰り上げ構文では、繰り上げの有無と名詞句内部からの抜き出しが相関する。小節でも同様の相関関係が存在することを示す。さらに、抜き出しに関する本発表の分析が結果構文、不変化詞構文、二重目的語にも適用可能であることを論じる。最後に、本発表の提案が理論的に妥当であることを示す。

[1] Lasnik, Howard (2001) “Subjects, Objects, and the EPP,” *Objects and Other Subjects*, 103-121, Kluwer, Dordrecht.

「名詞句内における値未付与素性の役割とその帰結」

田中祐太 (名古屋大学大学院)

本発表では、名詞句内に含まれる値未付与素性(以下、[uF])が果たす2つの役割を提案し、その帰結を探る。まず、D 主要部に含まれる格素性がDP をフェイズとして特徴づけ、DP 全体が転送を受けると主張する。この帰結として、転送によるラベル付け(cf. Chomsky (2015[1]))の可能性をスペイン語の事実などから示す。次に、名詞句内に含まれる[uF]が、移動によって形成されるコピーを計算効率のために不可視的にすると主張する。具体的には、値を付与された[uF]の数と種類によって複数のコピーのうち、どのコピーが不可視的になるかが変わると提案する。提案される分析の下では、低い方のコピーであっても統語部門においては可視的となりうるので、Chomsky (2015)の that 痕跡効果に対する説明にとって問題となる主語疑問文と主語関係節も統一的に派生可能になることが示される。また、非適正移動の違反は高い方のコピーが派生の途中で不可視的になった結果であると主張する。

[1] Chomsky, N. (2015) “Problems of Projection: Extensions.”

“Featural Approach to Distinction of Copies and Repetitions”

Takashi Munakata
(Yokohama National University,
Part-time Instructor) [招聘]

Assuming Merge is a simple operation that constructs the set {X, Y} ([1]), it has no room to introduce indices as IM applies. This means all instances of an identical lexical item are apparently the same in syntax, which makes difficult to identify copies of a single syntactic token, as suggested in [1].

This presentation proposes that agreement in case-feature/Q-feature contributes to the distinction between copies and repetitions of nominals. Assuming that case and Q-features on lower

instances of lexical items are unmatched, the topmost copy instance is distinct in feature value. Thus, the interfaces and the syntactic mechanism detect the topmost copy of lexical items by searching matched feature. I argue that a syntactic object K may be unified with an identical object L with matched F at Transfer or the interfaces if it has an unmatched counterpart feature.

[1] Collins, C. & Groat, E. (2018). “Distinguishing Copies and Repetitions,” ms. NYU & Goethe-Universität Frankfurt.

<<https://ling.auf.net/lingbuzz/003809/current.pdf>>

第三室 (11月10日午前)

司会 柚原一郎 (首都大学東京)

「一致形態の豊かさと音韻句の関係について」

土橋善仁 (新潟大学) [招聘]

語境界を超えて適用される音韻規則の研究では、音韻句と呼ばれる規則の適用領域が統辞構造にもとづいて定義されると考えられており、伝統的な音韻句形成のメカニズムでは、SVO 語順において、主語が後続する要素(助動詞や動詞)とは異なる音韻句に属しよう定式化されていた(Nespor & Vogel 1986[1]など)。本発表では、主語の音韻句の形成が、統辞構造だけでなく、当該言語の主語-述語の一致形態の豊かさにも影響されることを示す。そして、統辞理論のラベル付けアルゴリズムの枠組みのもと(Chomsky 2013, 2015)、統辞体は、その内部でラベル付けできない要素が最小探索で探知できる場合、音韻句として解釈されると提案する。これにより、豊かな主語-述語一致の有無、主語省略の可否、補文標識-痕跡効果の有無、そして主語と後続する要素との間の音韻規則適用の可否に対し、統一的な説明を与えることができると主張する。

[1] *Prosodic Phonology* [2] “Problems of Projection” [3] “Problems of Projection: Extensions”

「形態的有標性の仮説」と「競合理論」： 日英語の「強い結果構文」を巡って

西牧和也 (新潟食料農業大学)

形態的有標性の仮説(三宅 (2017[1]))によれば、日本語では、特定の意味には、特定の形態が必要となるが、英語では必要でないという。この仮説に基づき、三宅 (2017) は、所謂、強い結果構文を分析している。その分析によると、英語では、形態的有標性の仮説が述べる通り、「対象の変化」という意味が無形で付加され、強い結果構文が認可されるが(e.g. *Hanako pounded the metal flat.*)、日本語では、この意味を担う適切な形態が存在せず、当該構文は容認されないという(e.g. 「*花子が金属を平らに叩いた」)。本発表では、形態的有標性の仮説が、強い結果構文にも当て嵌まる、妥当性の高い仮説であることを論証する。具体的には、日本語では、V-V 複合語 (e.g. 「叩き延ばす」) が強い結果構文のステータスを持ち、その主要部動詞が「対象の変化」という意味を担う形態であると主張する。更に、競合理論 (Ackema and Neeleman (2004[2])) という考え方に依拠し、形態的有標性の仮説が捉えている一般的事実に対して理論的説明を試みる。

[1] 「日本語の発見構文」 [2] *Beyond Morphology*

司会 漆原朗子 (北九州市立大学)

「受け身「ラレ」の形態分離と繫属述語仮説

高橋英也 (岩手県立大学)

中島崇 (富山県立大学)

本発表では、日本語の受け身「ラレ」について、その膠着性を分散形態論の立場から分析し、これまで広く想定されてきたような単一の形態素ではなく、階層構造を内包する機能辞 (*r*)*ar* と *e* に分離されることを論じる。特に、(i) *e* は、「エル」が文法化した機能範疇 *Get* で、受け身文の主語を認可し、(ii) (*r*)*ar* は、出現・発生を表す「アル」が文法化した、非対格構造を持つ機能範疇 *Inch*(*oative*) であり、その補部に *VoiceP* を認可すると主張する。その上で、日本語における3種類の受け身文に対する、統一的な形態統語分析を提示する。本発表では、*InchP-vP* は、受け身文における

VoiceP と *GetP* の関係性を媒介する役割を持つ述語、*Trans-Predicate* (繫属述語) であると考へ、これを「繫属述語仮説 (*Trans-Predicate Hypothesis*)」と呼ぶ。本発表の分析の下では、日本語の受け身文とは、繫属述語と *GetP* により派生される重層的な文構造の総称であり、受け身「ラレ」が英語の受け身文を形成する接辞 *-en* に直接相当するという従来の見方は否定されることになる。

[1] Nakajima, T. (2014) "A Decompositional Approach to Japanese Passive," *JK 21*, CSLI.

「英語の接頭辞付き関係形容詞について」

石田 崇

(筑波大学大学院/日本
学術振興会特別研究員)

英語の関係形容詞 (*Relational Adjective*; 以下、*RA*) は、名詞を基体とした派生形容詞 (例: *oceanic* < (*ocean*+ *-ic*)) であり、その機能は、名詞を修飾し、その「分類」をすることである (島村 2014[1])。RA は、属性叙述を主機能とする性質形容詞とは異なり、通常は述語位置に生起できない (例: *chromatic drawings*; **those drawings are chromatic*)。しかし、数を表す接頭辞 (例: *mono-*, *di-*, *multi-*) が付くとそれが可能となる (*those drawing are monochromatic*) (Levi 1978[2])。接頭辞が付いた RA はなぜこのように述語位置に生起できるのだろうか。

本発表はこの問いに対し、Nagano (2018[3]) の分析に基づき、「主要部名詞削除と対比性」の観点から答える。Nagano によれば、RA は、述語位置に現れる場合であっても名詞前位用法を保持している。RA の分類機能によって、いくつかの類が対比される環境では「RA+N」の主要部 N が削除でき、その結果「be+RA」という形式が得られる。本発表では、接頭辞付き RA もこの1ケースであり、この場合、接頭辞そのものが対比性を生んでいると主張する。

[1] 『語と句と名付け機能』 [2] *The Syntax and Semantics of Complex Nominals* [3] "A

Conversion Analysis of So-Called Coercion from Relational to Qualitative Adjectives in English”

第四室 (11月10日午前)

司会 遠藤智子 (東京大学)

「Hunger (v.) かbe hungry (be+adj.) か — 通時的選択」

小倉美知子 (東京女子大学)

Hunger/thirst と be hungry/thirsty のように、対になる類義表現が古英語の時代から用いられていた場合、使い分けはどのようになされていたのか。Die とbe deadの場合は、もともと時制による使い分けはあったのか。Fearに対する be afraidではなく be afraid のように借入語が関連する場合はどうなのか。これらはOED3[1]やDOE[2]を活用することでかなり答えの出せる問題になってきている。古い文献も正しく読み解くことにより、一つの法則を立ててそれに合わせようとする理論を用いるよりは妥当な答えが導き出せる。本論では、web corpora を適切に用いることにより、現代英語の問題点を歴史的にはっきりと理由づけることを狙いとし、動詞とbe +形容詞の対立の構図の裏にある morpho-syntactic-semantic rivalry を解き明かす。
[1] *Oxford English Dictionary*, 3rd edition (<http://www.oed.com>) [2] *Dictionary of Old English* (Toronto, 1988-).

“The origin of the *get*-passive revisited”

Junichi Toyota (Osaka City University)

This paper presents various points why the causative origin should be considered as the historical source for the *get*-passive (cf Toyota 2008). In addition, it is argued that the causative type is not a result of regular grammaticalisation, as assumed for the inchoative type, but rather a contact-induced replication (cf. Heine and Kuteva 2005; 2006). The causative as a source of the passive voice may sound odd among the Indo-European languages, but it is commonly found elsewhere in the world. In this sense, the English *get*-passive is very peculiar within the same language family. In addition, dialectal contact, especially with Old Norse, is perhaps the

key to understanding its historical development, and this will support the causative type very neatly. Dialectal studies may reveal what has really happened to the *get*-passive.

司会 藤川勝也 (富山大学)

「混合動名詞の出現と衰退について」

平田拓也 (名古屋大学大学院)

Visser (1966[1]), Tajima (1985[2])などの先行研究では、動詞的及び名詞的特性の両方を示す混合動名詞が初期英語に存在していたことが指摘されている。しかしながら、混合動名詞を体系的に扱った研究はほとんどなく、その歴史的発達についての全体像が明らかであるとは言い難い。本発表では、Tajima (1985)のデータ及び電子コーパスから得られたデータに基づき、混合動名詞の歴史的発達を明らかにする。具体的には、混合動名詞は1450年頃に出現し、1700年頃まではゆるやかではあるが増加傾向にあったが、それ以降は、衰退傾向に転じたことを示す。そして、混合動名詞は屈折接辞としての *ing* が名詞的動名詞に適用されたことにより出現し、その衰退については、動詞的動名詞の構造が拡張したことに起因すると主張する。

[1] Visser, Frederikus (1966) *An Historical Syntax of the English Language*, Part II, E.J. Brill, Leiden. [2] Tajima, Matsuji (1985) *The Syntactic Development of the Gerund in English*, Nan'un-do, Tokyo.

「英語史における *How come* 構文の起源と発達について」

近藤亮一 (弘前大学)

玉田貴裕 (皇學館大学)

Radford (2018)では、*how come* 構文は話者によって異なる二つの構造を持つと示唆されている。

(1) a. [INTP how [INT come]...]

b. [INTP how come [INTØ]...]

(cf. Radford (2018: 253))

(1a)では、*how* と *come* がそれぞれ INTP の指定部と主要部を占め、(1b)では、*how come* が単一の疑問詞として INTP の指定部を占めている。本発表では、歴史コーパスから得られ

たデータに基づき、英語史における *how come* 構文の起源と発達過程を明らかにする。具体的には、*how come* 構文の起源は、*how* と *come* が動詞第二位現象により CP 領域に移動している文であり、それらが(1a)のように CP 領域に基底生成されるようになることで、*how come* 構文が発達したと主張する。また、(1b)のように、*how* と *come* が一つの構成素として生起する構造が生じることで、二つの構造が共存することになると主張する。さらに、この分析の帰結として、*how come* が単独で用いられる例の出現時期と生起制限が正しく説明されることを示す。

[1] Radford, Andrew (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*, Cambridge University Press, Cambridge.

第五室 (11月10日午前)

司会 西山淳子 (和歌山大学)

「言語における leakage 現象」

森貞 (福井工業高等専門学校)

leakage 現象とは、『主節述語によってコード化されている【認識・意識】が従属節に浸透し、その【認識・意識】が従属節において(語彙の形で)言語化される現象』として規定される言語現象である(Langacker (2009 [1])). 本発表では、一般に誤用とされる言語表現の中にも、leakage 現象という観点から捉え直すことにより、その出現(に関わる心的プロセス)を説明することができるものがあることを例証する。具体的には、“I don't {think/believe/know that} -p.”という英語表現(-p がエコー表現である場合を除く)と、「～(ら)れることができる」(重複した可能表現)という日本語表現を取り扱う。コーパス言語学の手法を援用した分析を通して、前者の場合には、上記の leakage 現象の規定をそのまま適用できる(森2018[2])のに対して、後者の場合には、拡大適用(解釈)の必要があることを指摘する。

[1] *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter.[2] 「～ないとは思わない」に訳せな

い I don't {think (that) / believe (that) / know that} -p, *JCLA* 18.

「N-free X と N-less X の構文形態論に基づく分析」

菊池由記 (大阪大学大学院)

英語の接尾辞 *-free* と *-less* は、*smoke-free*, *smokeless* のように名詞(N)を基体に取り、主に「Nがない」という欠如の意味を表す。先行研究 (Bauer et al. (2013[1])) では、*N-free* の表現が示す「Nの欠如」を肯定的である(つまり、*N-free* の基体Nは望ましくないもの)とみなすという点で、*N-free* は *N-less* と意味が異なることが示唆されている。本発表では、*N-free* と *N-less* の共起語を含めた *N-free X* と *N-less X* の形式 (e.g. *smoke-free workplace*, *smokeless tobacco*) に焦点を当て、Booij (2010[2]) の構文形態論の枠組みを応用し、これらの表現の意味規定の考察を試みる。

まず、コーパスを用いた共起語の比較を通して *N-free* と *N-less* の意味の違いを検証し、コーパスの実例に基づき、*N-free* / *N-less* における基体Nとその共起語Xの意味的關係を指摘する。さらに、*smoke-free X* や *smokeless X* のような表現を「構文」とみなし、語用論的意味を含む *N-free X* / *N-less X* の構文スキーマを規定する。この考察から、*N-free* / *N-less* のような類義表現を比較する際、共起語も考慮に入れることで、例えば *alcohol-free X* / **alcoholless X* の容認性の違いを説明できることを示す。

[1] Bauer et al. (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford. [2] Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*, Oxford.

司会 窪田悠介 (国立国語研究所)

「情報焦点移動と強調—形容詞の前置を伴う Preposing around Be を事例として—」

本多正敏 (横浜商科大学)

生成文法理論の Cartography の枠組みを採用し、Cruschina (2011[1]) は、シチリア語をはじめとするロマンス諸語における対比的・非対比的焦点移動現象の観察に基づき、CP 領域には焦点を保障する統語位置が2つ存在する

と提案している。1 つは情報の訂正を主眼とする対比焦点(Contrastive Focus), もう1つは話し手の評価を伴う強調的情報焦点(Emphatic Information Focus)である。[1]の提案を踏まえ, Trotzke and Quaglia (2016[2])は, ドイツ語の不変化詞前置現象の観察に基づき, 強調的情報焦点における話し手の評価は, 感情表出性 (Expressivity) (cf. Morzycki (2012[3]))に由来すると提案している。[2]の提案は興味深いものの, ドイツ語以外の言語からも経験的な支持が得られるかどうかについて, 十分な考察はなされていない。本研究では, [2]の考察を, 形容詞の前置を伴う Preposing around Be に拡張し, 当該現象によって [2]の提案が経験的に支持されることを議論する。[1] “Discourse-Related Features and Functional Projections” [2] “Particle Topicalization and German Clause Structure” [3] “Adjectival Extremeness”

「束縛と作用域の再構築効果のずれ」

堤博一 (東北大学大学院)

移動体の再構築という方略は, 束縛関係 (Which argument that John_i is a genius did he_{*ij} believe?)や逆作用域解釈 (Someone from NY is likely to win the lottery; likely > someone)の認可の説明に用いられてきた。しかし, これら2種類の再構築の相互作用, 例えば作用域再構築解釈と束縛再構築が連動的であるか否かについては議論の余地がある (Fox (1999[1]), Lechner (2013[2])). 本発表では日本語の観点からこの問題に取り組む。具体的には左枝抜き出しを含む例文から, 前置された左枝構成素が作用域再構築効果を示す一方で, 束縛再構築が義務的ではない (左枝構成素内部の R 表現が, 痕跡を C 統御する代名詞の先行詞になれる)事例を提示する。同様の効果が等位構造からの第一等位項抜き出し等にも見られることを確認し, これらの現象に説明を与える。

[1] “Reconstruction, Binding Theory, and the Interpretation of Chains” [2] “Diagnosing Covert Movement: The Duke of York and Reconstruction”

第六室 (11月10日午前)

司会 高梨博子 (日本女子大学)

「構文イディオム化とその後の展開」

大室剛志 (名古屋大学) [招聘]

本発表では構文イディオム化とその後の展開について論じる。構文イディオム One's Way は, 基本タイプから派生タイプへと段階を踏むいわば構文イディオム化というプロセスによって得られ, 一旦構文イディオムが成立すると, その後の展開として更に派生的な *belch* タイプや意識使用が可能になる (Omuro (2003[1])). この議論の傍証として, 英語における半動名詞構文を取り上げ, *in* 付き動名詞構文から, *-ing* 形の半動名詞構文が一旦成立すると, その後の展開として, *-ing* 形以外の変種の述詞補部が生起可能になると論じる (大室(2016[2])). 2つの構文を分析した後, 両者の共通点を抽出することにより, 文法における拡張のメカニズムについて考察する。〜化というプロセスと一旦〜が成立した後に〜が可能になると述べるには, 文法理論の中に, ある文法のある段階から次の段階への移行の可能性に言及する法則を含める必要があると論じる。

[1] “A Dynamic Approach to the *One's Way*-Construction in English,” *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, Kaitakusya. [2] 「構文の成立過程とその後の展開—半動名詞構文を中心に—」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』開拓社。

「子どもの前置詞句単独発話—談話的文脈と前置詞ごとの相違の観点から—」

堀内ふみ野 (大東文化大学)

本研究では, 用法基盤主義の立場から前置詞の習得過程を探るため, 事例研究として子どもが前置詞句を単独で使う発話 (e.g. “Like me.”; “In the box.”) に焦点を当て, CHILDES を用いてその生起頻度および生起環境の特性を明らかにする。

Diessel(2004[1])は, 等位節や副詞節の習得過程を分析し, 子どもは最初それらを主節や関連する節と組み合わせることなく単独で産出する傾向にあり, 談話の中で隣接して生起

する節の組み合わせに基づいて次第に複数の節を含む文の構造を習得していくことを示した。これを踏まえつつ本研究では、子どもによる前置詞句の産出事例を調査し、月齢が早いときほど前置詞句単独発話も起こりやすいこと、前置詞句の種類によって単独発話での生起頻度が異なることを定量的に示す。また、前置詞句単独発話の機能を先行発話との関係に基づいて分類し、その使用に見られる特性を生起文脈との関わりから考察する。

[1] Diessel, Holger (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*, Cambridge University Press, Cambridge.

司会 眞田敬介 (札幌学院大学)

「文脈における2種類の道具主語構文: 焦点と集合に含まれる要員に着目して」

石川和佳 (筑波大学大学院)

道具主語構文(*instrument subject constructions, ISCs*)は、人が使用する道具が主語位置に生起する構文であり、人動作主が主語位置に生起する場合は、道具を *with* 句で表すことができる(例: *The key opened the door. John opened the door with the key.*)。Mack (2010[1])は、道具が焦点として、*open proposition* の変項 *X* の値を埋める場合に、ISCs が容認されると提案する(例: *X opened the door.*)。本発表では、Mack の分析を援用しながら、変項 *X* を埋める要員が、想定される集合から選択される時点で、その集合に道具だけが含まれる場合(例: 集合 {*the key, this key, that key...*})と、集合に人動作主が含まれる場合(例: 集合 {*the key, John...*})とで、2種類のISCsが存在することを主張する。それにより、ISCsには、実は2つの伝達機能があることが分かる。さらに、2種類のISCsが関係節にパラフレーズ可能か等の分類基準を提示することで、その存在の妥当性を示す。

[1] *Information Structure and the Licensing of English Subjects*

「Speaking of 構文の成立過程に関する考察: 構文化の観点から」

山内昇 (大同大学)

近年、談話標識に関する研究が盛んになり、その成立過程を構文化 (Traugott and Trousdale 2013 [1]) の観点から捉え直そうという試みが進められている。本発表では、事例研究の一つとして、話題転換の際に使用される *speaking of* 句を取り上げ、その談話標識としての成立過程を構文化の観点から考察する。早瀬 (2017 [2]) は、*which* が取り立てられた *speaking of which* に着目し、同表現が話題転換の機能を有するチャンクとして構文化を遂げていると分析している。本研究では、従来の分析とは異なり、構文化は *which* の取り立てが可能となる前段階に相当する *speaking of X* の段階に発生していると分析する。より具体的には、近年における同表現は、全体で一つのチャンクを構成し、その構文的意味として、話題転換に伴う関係性の格率への違反を緩和する機能をもつ談話標識として、構文化を遂げていると主張する。

[1] *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford. [2] 「分詞表現の談話標識化とその条件: 懸垂分詞からの構文化例」『構文の意味と広がり』くろしお出版。

〈特別講演〉

第I室 (11月9日午後)

司会 窪田悠介 (国立国語研究所)

「理論言語学に基づく自然言語理解の最前線」

戸次大介 (お茶の水女子大学)

現在の自然言語理解には、二つの対照的な潮流が存在する。一つ目は、2010年代半ば以降、爆発的に普及するに至った深層学習に基づくニューラル言語処理であり、「経験主義的言語処理」の現代版ともいえる。二つ目は、理論言語学、数理論理学の流れを汲む「合理主義的言語処理」のパラダイムである。本講演で紹介する英語・日本語のための含意関係認識システム `ccg2lambda` [1] は後者に基づく最先端技術であり、深層学習と範疇文法による統語解析、形式意味論に基づく意味合成、定理自動証明器等を組み合わせたハイブリッドな手法により構成されている。それによって、言語学的アプローチでは不可能と断じられていた現実的な被覆率や高い解析精度が実現していることを踏まえ、理論言語学が自然言語理解において果たす役割について再考する。

[1] "Higher-order logical inference with compositional semantics," Koji Mineshima, Pascual Martinez-Gomez, Yusuke Miyao, Daisuke Bekki, EMNLP2015, pp.2055-2061.

司会 西山淳子 (和歌山大学)

“Linguistic competence, performance, entailment, and inference—How is our mental system organized?” (E)

Kentarō Nakatani (Konan University)

The distinction between linguistic competence/knowledge and performance has been one of the bona fide features of generative grammar, where the former is assumed to provide “instructions” to the latter [1]. But what does it exactly and practically mean? Relatedly, what is the status of pragmatic inference in this picture? Does the distinction between logical entailment and

pragmatic inference correspond to the knowledge vs. performance dichotomy?

In this talk, I address this issue by reviewing some previous experimental studies, including my own, on how pragmatic inferences unfold in the course of real time. A particular focus is put on inter-clausal inferences that are triggered by lexical semantics. I suggest that a model of linguistic knowledge must be constructed in such a way that it is compatible with the anticipatory aspect of language processing. Otherwise, a theory of grammar would be little more than an analytic description of language without a biological basis.

[1] Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.

第II室 (11月9日午後)

司会 藤川勝也 (富山大学)

「対話空間と談話の文法」

山口治彦 (神戸市外国語大学)

私がいて、あなたがいて、ことばのやりとりを交わす。対話はことばの伝達においてもっとも普通のコンテキストである。ことばはそこで繰り返し使われ、おそらくはそこで発達した（もしくは、そこでも発達した）。だとするならば、私がいてあなたがいる対話の状況がことばの構造や用法にかかわることもあるはずだ。この発表では、英語の *come/go*, 九州方言の「行く／来る」、そして日本語の指示詞「コ／ソ／ア」などの直示表現に見られる人称対立に加えて、英語話法の構造と人称の関係や日本語の引用助詞「と／って」の使い分け (山口 (2009 [1]) の問題を取り上げて、Yoshimoto (1986 [2]) が提案した会話空間 (私とあなたの領域；私は「対話空間」と呼びたい) がこれらの構造や現象に関与することを示し、ことばに残された対話の刻印を跡づけたい。併せて、聞き手を念頭に置いた談話の文法のあり方について考えてみよう。

[1] 『明晰な引用, しなやかな引用』くろしお出版。 [2] "On demonstratives *KO/SO/A* in Japanese." 『言語研究』90.

〈シンポジウム〉

A室 (11月9日午後)

「統語-音韻インターフェイスに必要な情報の表示をめぐる」

司会 漆原朗子 (北九州市立大学)

極小主義理論は限られた素性の集合、構造を組み立てるための操作である併合、および併合によって生成されたフェイズを音韻・意味部門に送るための転送のみを仮定する。同時に、理論は感覚運動系および概念意味系とのインターフェイスであるスペルアウトにおいて必要十分な情報を保証しなければならない。

しかし、転送に関しては音韻および意味の写像は平行的に収束するのが理想であるが、Chomsky(2013: p.107 および fn.12)も指摘する通り、そこには非対称性が存在する可能性がある。さらに、分散形態論の主張に基づき語彙部門が解体された場合、派生語や複合語など従来は語彙部門における形成と考えられてきた要素も統語論あるいはそれ以降の部門において扱われることとなる。

本シンポジウムでは統語論、音韻論、形態論にかかわる問題について概念的および経験的な観点から議論し、より制限された文法理論のありかたを考える。

「削除が意味解釈に及ぼす影響について」

講師 木村博子 (千葉工業大学)

講師 成田広樹 (東海大学)

本発表は、様々な省略構文において削除が意味解釈に与える影響を考察する。例えば、*why-stripping*(1)参照)や短縮応答(2)参照)等の動詞句や複合語の一部の残留を許す省略構文では、慣用表現としての非構成的解釈は取り難く、構成的解釈のみが可能である。

(1) A: 太郎が市長に手をあげた。

B₁: なんで手(を)? B₂: なんであげた(の)?

(手をあげる—構成的解釈: 手を上に掲げる; 非構成的解釈: 殴る、立候補する)

(2) A: あの女優は何作りが得意なの? B: 役です。(役作り—構成的解釈: (ポーカー、麻雀等の)役を作ること; 非構成的解釈: 演技を工夫す

ること)

本発表では、当該の非構成的解釈の欠如に対し、「非構成的解釈は、語彙(音韻素性)の後期挿入の結果に基づき辞典(Encyclopedia)部門において決定される」とする分散形態論(Marantz (1996)参照)に依拠した分析を提案する。

Marantz, Alec (1996) “‘Cat’ as a Phrasal Idiom: Consequences of Late Insertion in Distributed Morphology,” ms., MIT.

「複合語の音韻的実現およびオノマトペ述語の意味解釈に必要な情報」

講師 漆原朗子 (北九州市立大学)

動詞由来複合語は連濁において項/付加詞非対称性が観察される。しかし、3 モーラ動詞では「人」を指す場合以外は全て連濁する。

(1) a. 窓ふき/空ぶき

b. 魚つり/沖づり

(2) a. 指づかみ/魔法つかみ/普段づかい

b. 金ばらい/露はらい/着ばらい

次に、通常は軽動詞と共に変化を表すオノマトペでも繫辞と共に主語の心理状態を表すことができる。

(3) a. 私は (彼には) がっかり/びっくり/
はらはら/どきどきだ。

さらに、2 モーラを完全反復したオノマトペの多くは繫辞と共に状態を表すが、そうでないものは動詞的あるいは副詞的にしか用いられない。

(4) a. がさがさ/*がさごそだ。

b. がたがた/*がたごそだ。

分散形態論によってこれらを説明するために、無範疇の語根がいかに述語として実現され、また、統語構造が音韻部門でどのように保持されているのかに関して提案を行う。

「Pred⁰」

講師 渡辺明 (東京大学)

本発表では、Matushansky (2019) が Pred⁰ の存在に疑義を呈しているのに対し、英語および日本語の現象の分析を通して、Pred⁰ の役割を明らかにすることを目標とする。日本語の観点からは、Nishiyama (1999) によって提案されているように「で」が統語

構造で Pred^0 として働いていることを確認した上で、 Pred^0 の形態的要請がもたらす帰結を小節について検討する。また、「で」が分裂文にも出現することから、 Pred^0 が焦点を表示するための投射の主部と密接な関係にあることを論じ、英語の小節が逆転語順の擬似分裂文であることを許すのは Pred^0 と Foc^0 の類縁性によるものであるという可能性を追究する。 Pred^0 が Foc^0 と類似の範疇であるならば、焦点解釈を強制しないことを明示するという意味的な働きを同定できることも、このあらたな視点から得られる帰結に数えられる。

B 室 (11 月 9 日午後) *公開シンポジウム

“The Semantics of Intensional Phenomena”

司会 Christopher Tancredi
(Keio University)

This symposium focuses on challenges faced by analyses of intensional phenomena. David Oshima proposes a novel semantics of “should(p)” based on a comparison of situations that result by making p or prominent alternatives to p happen. Junri Shimada proposes a mathematical model to capture the intuition that entities can change from world to world and from time to time while still remaining the same entity. Joseph Tabolt proposes a new way of rescuing a solipsistic analysis of epistemic *may/might/must* by linking epistemic modality to evidence. Christopher Tancredi proposes to eliminate possible worlds from semantics, accounting for intensional phenomena instead by using structured meanings and an associated inference process that makes no appeal to possible but non-actual worlds.

“How “should” works: With a special focus on the issue of supererogation”

講師 David Oshima (Nagoya University)

Major existing approaches to prioritizing modality (which subsumes deontic and bouletic modality) suffer from the problem of supererogation (“giving too much”), validating the inference from the premises (i) that p should be the case and (ii) that “p and q” is better than “p (and

not-q)” to the conclusion that q should be the case. This forces us to admit, for example, that if linguistics majors should read at least 10 books in a semester, then they should read at least 11, 12, 13, ... books in a semester. I propose a novel account of “should”, under which “should(p)” essentially means that making p happen is, or constitutes part of, the sole way (among the prominent alternatives of p) to make the situation (of evaluation) “good enough”.

“Mass nouns and intensionality”

講師 Junri Shimada (Keio University)

In Link’s (1983) lattice-theoretic approach, a mass noun denotes a set of inherently mass individuals, ordered by the material-part relation. The existence of such individuals is doubtful, however, because a name can be predicated of by a mass noun and a count noun simultaneously. Moreover, once intensionality is taken into account, one sees that the material-part relation between individuals cannot be intrinsic; I might wish the upper half of the wine in my glass were blood. This talk proposes an embodiment function, which for each possible world and each time, maps individuals to the spaces they occupy, which are further mapped by a measure to nonnegative reals. *Wine* then denotes the inverse image under the embodiment function of the set of all spaces of positive measure that are part of the maximum space occupied by wine.

“Evidence and epistemic modality”

講師 Joseph Tabolt

(University of Electro-communications)

By Grice’s maxims, we assert only what we believe true. Asserting (A1) requires the speaker to believe *jiro*’s in *boston*. Meanwhile, (A1’) is traditionally claimed to require the speaker to believe his knowledge entails/doesn’t rule out (A1). However, this analysis does not explain the judgment differences reflected in parentheses below.

A1: Jiro is in Boston. / A1' Jiro must/might be in Boston.

B: But he hates Boston.

A2: Oh? Then I take that back.

(A1,B,#A2/A1',B,A2)

This talk proposes that *might/may* quantify over the speaker's set of maximally stereotypical worlds and that accepting evidence for a proposition ensures its compatibility with this set. (B) ensures the compatibility of *Jiro is not in Boston* with this set. Since its complement (A1)'s compatibility is not ensured, (A1'), embedding (A1), becomes retractable. Meanwhile, non-modal (A1) is not affected.

“Toward a One-World Semantics”

講師 Christopher Tancredi
(Keio University)

Possible worlds are central to modern intensional semantics. They are used to model propositions, and play crucial roles in the semantics of propositional attitudes and modals. However, they face two major shortcomings. First, possible worlds analyses of propositions are unable to distinguish among necessary or impossible propositions. Second, they fail to distinguish valid from invalid reasoning based on necessary or impossible premises and conclusions. While some of these problems are well known in the areas of propositional attitudes, I show that they extend to modals of all varieties, intensional transitive verbs, as well as to modal subordination. I argue that propositions should be analyzed as structured objects with truth conditions, but that possible worlds should be eliminated and possible worlds semantics replaced by a semantics of inference that is sensitive to propositional structure.

C室 (11月9日午後)

「話しことばの研究と「スタンス」：言語形式から社会的アイデンティティまで」

司会 山下里香(関東学院大学)

スタンスは「評価」や「視点」などの概念を含め、これまで多様なアプローチで取り上げられてきたが、その概念整理が近年進められてきている。特に Du Bois (2007) による「スタンス理

論」は、認知や社会性を基盤としながら言語現象の説明も目指している点が注目に値する。本シンポジウムの目的は、「スタンス」をどのように話しことばの言語データに応用できるのか、また、そこからどのような知見が得られるのかを探求することである。講師たちは、スタンスの多層性や創発性に着目しながら、既存の文法理論では十分に説明されていない話しことばの定型性、スタイルシフト、社会的コンテクストに根ざした談話で遂行されるイデオロギー構築や社会化などをテーマに、他の概念や方法論(用法基盤モデル、相互行為社会言語学、フレーム理論、会話分析など)も参照しながら、「スタンス」概念を用いることで得られる知見の可能性とその課題を論じる。

[1] “The stance triangle” in: Englebretson (Ed.) *Stancetaking in discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, John Benjamins.

「会話における繰り返し: 動的なスタンス構築」

講師 鈴木亮子(慶應義塾大学)

Du Bois (2007 [1])の Stance Triangle のモデルでは第一話者のスタンス表明のあと第二話者がスタンス表明することで二者間のスタンス調整が行われる。本発表では三人以上の会話の短い断片の「繰り返し」に着目していくつかの断片を検討する。Du Boisのモデルは3人以上の会話でも有用な出発点となり、スタンスが動的に構築される過程を示すことができる。

第一話者の発話を他の話者が繰り返すことが、様々な方向に談話を動かすことがわかる。(1) 第一話者のスタンス表明発話の一部を第二話者が繰り返すことで、そのスタンスに同調し「加勢」することで、他の話者のスタンスとの違いを際立たせる(2) 第一話者のスタンス発話の中で使われた特定の表現を新しいスタンス対象として取り出して繰り返すことで、スタンス表明行動の「ずらし」を起こす(3) 言葉だけではなく動作を繰り返すことで、話者間の「対立遊び」の側面を際立たせる。

[1] “The stance triangle” in: Englebretson (Ed.) *Stancetaking in discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, John Benjamins.

「児童の会話におけるスタンススタイルおよびコードの選択」

講師 山下里香(関東学院大学)

会話におけるスタイルやコード選択(スタイルシフト・コードスイッチング)は、それぞれ語用論、相互行為社会言語学を中心に行われてきた。しかし、文法と社会的相互行為をつなぐ「スタンス」という視点は、それぞれ「一言語の会話」・「多言語の会話」として別々に研究されがちであったこれらの研究を統合できる可能性を持っている。例えば、会話において特定のスタイルやコードの使用がもたらす、語用論的意味および社会的指標性は、スタンス表明と調整の繰り返し及び蓄積によって生じる(Du Bois 2007 [1])と考えられる。本発表では、スタイルシフト・コードスイッチングの研究に stance の概念や、Stance Triangle のモデル(Du Bois 2007 [1])を応用する利点と、現時点での課題を、小学生の日本語モノリンガルおよびバイリンガル会話のデータを例に提示する。

[1] “The stance triangle” in: Englebretson (Ed.) *Stancetaking in discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, John Benjamins.

「観光場面の対話におけるスタンス行為」

講師 高梨博子(日本女子大学)

Du Bois (2007 [1]) が提唱するスタンス・トライアングルのモデルを「観光場面で交わされる対話」に活用し、同対話におけるスタンス行為の多面性を明らかにする。観光都市における観光客(ゲスト)と地元のガイド(ホスト)の英語による対話を分析した結果、1)「観光地」と「対話者」双方のアイデンティティに関するスタンスは多面的に構成され、対話の中で間主観的に創発・再生産されていること、2) 個々のスタンスは、時間的かつ空間的に重層する中で累積されていくこと、といった特徴がみられた。こうしたスタンス行為のプロセスを通じて、観光地や相手に対する認識や感情が形成されるとともに、ホストとゲスト双方が、「観光」という異文化交流を実践するコミュニケーション能力をもつ「グローバル市民」として社会化されていくことを論じる。

[1] “The stance triangle” in: Englebretson (Ed.) *Stancetaking in discourse: Subjectivity, Evaluation,*

Interaction, John Benjamins.

「二言語による社会化: 創発的・多層的なスタンス構築とイデオロギー」

講師 岩田祐子(国際基督教大学)

Du Bois (2007 [1]) の Stance Triangle のモデルを使い、相互行為の参与者との間で対話を通して公的に遂行される社会的行為としての stance という観点から言語による社会化について考察する。日英語バイリンガル家庭の夕食時の会話において、第一話者であるイギリス人の父親が、イデオロギー(例、食事のマナー、家庭内の父親と母親の役割、ジェンダー・イデオロギー、階級意識、アメリカ英語・イギリス英語に対する意識)を stance object と扱うことで自身を位置付けスタンス表明をし、他の参与者である子や日本人の母親も同じようにその stance object に対し自分自身を位置づけ、スタンス表明をする。両者の間でスタンス表明と調整が繰り返され、このプロセスが幾層にも積み重なることこそが社会化である。Stance triangle は会話のインタラクションによって作られ、創発的なものである。

[1] “The stance triangle” in: Englebretson (Ed.) *Stancetaking in discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, John Benjamins.

D 室 (11 月 9 日午後)

*公開特別シンポジウム(言語系学会連合との共催)

「ことばは現実をどう捉えるか—ことばの対照研究のおもしろさ—」

司会 廣瀬幸生(筑波大学)

「ことばは、それを使う人のこころや、それが使われている文化・社会のありようを映す」ということが古くから言われている。そしてこの考えは、人文系学問のみならず、心理学や社会学ひいては精神医学などの諸学問において、「人間とは何か」を研究する際の重要な礎となっている。ところが、経済優先で英語中心のグローバル化が進む現代では、言語のコミュニケーションツールとしての実用性のみが強調されるあまり、英語以外の外国

語はおろか母語である日本語でさえも軽視される風潮にある。このような現状に鑑み、言語系学会としては、「人間のこころ・文化・社会を映し出す鏡」としての言語という原点に立ち戻り、その観点の重要性を改めて社会に向けて発信していく必要がある。本シンポジウムはこの目的に立ち、日本語と外国語を比較する対照研究のおもしろさと奥深さを、日英・日中・日独・日仏を例にとり、4名の講師に熱く語ってもらうものである。

「移動事象の言語化：実験調査による英語と日本語との対照」

講師 松本曜（国立国語研究所）

各言語の話者は、人や物が移動する事象をどのような文で表現するのだろうか。そこには興味深い言語差がある。この発表では、国立国語研究所の対照言語学プロジェクトにおいて行われたビデオ発話実験の結果に基づいて、英語と日本語の話者による移動事象の言語化の違いを考察する。具体的に比較するのは、移動の様態（足の動きなど）、経路（上下出入など）、及び移動の直示性（話者領域への移動かなど）を、文のどの位置で、どのような頻度で表現するかである。実験の結果から以下の点を指摘する。①様態の表現頻度は英語話者の方が高く、直示性の表現頻度は日本語話者の方が高い。②直示性を表現する条件が日英語で異なり、日本語では話者の視覚、英語では話者とのインタラクションが関わる。③経路は日本語では動詞、英語では前置詞・副詞で表現されることが多いが、日本語でも動詞以外の手段が用いられ、その例外パターンは通言語的傾向を反映している。

「話し手の気持ちは言語にどう反映されるか—日本語と中国語の場合—」

講師 井上優（麗澤大学）

言語には、「コトガラ」の叙述と「話し手の気持ちの表出」という2つの側面がある。本発表では、3つの現象を例に、話し手の気持ちの表し方が日本語と中国語で大きく異なることを述べる。①日本語では音声的強調により表出できる気持ちを、中国語では副詞で表出することが多い。これは「コトガラを描き出す様式」が両言語で根本的に異なるため

ある。②日本語では話し手の気持ちの動きを感動詞で頻繁に表出するが、中国語ではそうしないことが多い。これは、会話参加者間の心理的距離感が異なるために、会話参加者の関係維持のために必要なことが違ってくるためである。③意味的に対応する文末モダリティ表現を比べた場合、日本語の表現のほうが中国語の表現よりも強い語気を表せることが多い。これは、中国語では「話し手の認識」が、日本語では「現実世界や聞き手の認識に関する想定」が文の述べ方の選択基準となっているためである。

「ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞を使った『驚き』と『独白』の表示：その共通性と違い」

講師 岡本順治（学習院大学）

言語を使ったコミュニケーションでは、伝える情報・知識だけが重要なのではない。話し手がそれをどのように捉えているのかを「読む」ことも重要になる。ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞は、そのような「捉え方」を示し調整するためのひとつの表現手段である。本発表では、発話状況、発話行為、話し手の心的態度という側面から「驚き」と「独白」がどのように心態詞／終助詞を用いて表現されるのかを比較する。その結果、①「驚き」も「独白」も心態詞や終助詞だけで表されるものではなく、②イントネーションや間投詞との関連性を持つことが共通点として確認できる。しかし、③ドイツ語では談話で前提とされる知識との関係から異なった心態詞を用いて驚きの種類を表すが、日本語では間投詞で異なった驚き方を表すこと、④ドイツ語での「独白」は特定の構文と関係し、聞き手の存在が仮定されているが、日本語の場合には必ずしもそうではないことを主張する。

「フランス語の語彙の抽象性・操作性と日本語の語彙の具象性・指示性」

講師 渡邊淳也（東京大学）

フランス語は17世紀に人為的に語彙を大幅に削減したという、めずらしい来歴をもつ言語である。その影響はこんにちも残っており、フランス語では、常用される語数が日本語にくらべて明確に少なく、その結果、多義

語がたいへん多くなっている。少数の基本語がくり返しをいとわず用いられるため、意味を画定するためには、言語内・言語外の文脈との相互作用がきわめて重要になる。

本発表では、名詞をおもな対象として、特徴的な事例を紹介するとともに、その意味合いを考える。フランス語の語彙は、指示対象の実体を指定せず、単に特徴を記述したり、当該の対象に主体が関係する態様 (Cadiot & Nemo (1997) [1] の用語でいう「外在的特性」*propriété extrinsèque*) だけを示す傾向がある。フランス語とは対照的に、日本語では実体への指示を明確にすることが多く、それを省く表現は有標であることが多い。

[1] « Pour une sémiogenèse du nom »

E室 (11月10日午後)

「フェーズ境界を超える意味・音声解釈—フェーズ理論に基づく言語インターフェースの研究—」

司会 金子義明 (東北大学)

本シンポジウムでは、極小主義理論におけるフェーズ理論が意味・音声解釈に対して持つ意義について考察する。Chomsky, Gallego, and Ott (2017 (v.2), 2019 (v.3)) では、転送について新たな提案がなされ、フェーズ境界を超える、非局所的な意味・音声解釈操作適用の可能性が示唆されている。このような展開を踏まえ、6人の講師が4件の発表を行い、フェーズ境界を超える意味・音声解釈の必要性を検討する。考察の対象は、フェーズを超えて形成されると考えられる各種依存関係や、フェーズの特性に還元されると考えられる移動等に課される諸制約であり、時制、外置、関係節化、wh 移動や移動の方向性、島の制約など多岐にわたる。これら検討を通して、構造構築に関する理論への帰結についても考察する予定である。シンポジウムの最後には、全体討論の時間を設け、シンポジウム参加者と議論を深める。

「解釈プロセスの非局所的適用の可能性について」

講師 金子義明 (東北大学)

Chomsky, Gallego, and Otto (2017 (v. 2), 2019(v. 3)) (CGO) の提案によれば、転送が適用された構造は、以降の統語操作にとって不可侵領域となり、組み替え不可能になるが、もとの構造から消え去るわけでない。C-I インターフェースへ転送された構造は、解釈操作の適用対象となり、非局所的適用の可能性も示唆されている。本発表では、英語の時制の一致 (sequence of tense)、時制の二重接触 (double access)、時の付加詞節の時制の調和 (tense harmony)、などの現象を考察し、これらの現象の認可条件の適用や時制解釈に関わる評価時 (Evaluation Time)、参照時 (Reference Time)、および事象時 (Event Time)の同定プロセスが、フェーズ境界を越えて適用される可能性があることを論じ、上記 CGO の提案との整合性について考察する。

「下降外置：併合と局所性について」

講師 高橋将一 (青山学院大学)

英語の付加詞の外置の中には、外置された付加詞の被修飾要素が、付加詞より構造上高い位置に現れる事例がある。付加詞と被修飾要素のこのような構造関係は、次の二つの操作により生成されると提案する。まず、付加詞が、被修飾要素の連鎖の頭部に非循環的に併合する。そして、付加詞を含んでおらず、被修飾要素の連鎖の頭部ではないコピーが、頭部より高い位置へ移動する。連鎖の頭部ではないコピーは、まずは頭部に非常に近い位置に移動して多重指定部構造を形成することで、局所性を満たす形で頭部を飛び越えることが可能になる。このように派生された構造に対して、移動の方向性と考えられている効果を句構造の形態から導き出す Fox and Pesetsky (2009)の線状化の理論を適用することで、付加詞は、表層表示では節末尾に位置付けられる。また、本分析の帰結として、付加詞が節の中間位置には現れることができないという事実を移動の局所性の観点から説明する。

「制限的關係節における共有構造」

講師 稲田俊一郎(明治薬科大学)

制限的關係節の主要部名詞句は、主節要素でありながら關係節内の空所位置でも解釈される。同時に、關係節は付加詞であり、その性質から非循環的併合操作の対象とみなされることがある。本発表では、被付加要素である主要部名詞句が付加詞節内で解釈を受ける再構築効果の仕組みがいわゆる「移動のコピー理論」の基で説明され得るのか、Chomsky, Gallego, and Otto (2019(v.3))における統語構造構築の枠組みを参照しつつ、名詞句内統語操作に関する近年の分析を踏まえて考察する。特に、主要部名詞句移動分析において仮定される側方移動操作(Nunes (2004)など)で形成される主要部名詞句の連鎖に関する問題について、側方移動操作自体の妥当性も含めて考察する。また、併合操作によって共有構造が生じる可能性に触れ、名詞句内統語操作によって結果的に共有構造が解消されることで制限的關係節構造が派生する可能性を検討する。

「等位接続された残余句を含むスルーシングと島の修復」

講師 瀧田健介(同志社大学)

講師 中村太一(福井大学)

講師 前田雅子(西南学院大学)

フェイズに関する理論的問題の一つとして、いわゆる島の制約がフェイズに還元できるかというものがある。これに関して、その違反が省略によって修復されるといういわゆる島の修復現象について、Merchant (2001)は、命題レベルの島についてはそもそも島を含まない意味的にのみ同一である省略部を仮定するものの、その他の島、特に左枝条件の効果はPFにおいて生じるとし、だからこそ省略によって修復されうると分析している。一方、近年左枝条件に関して、違反がない省略部を仮定できない場合には省略が適用されても島の効果が生じるという観察に基づき、修復効果はみかけ上のものであるという分析がなされてきている。本発表では、等位接続された残余句を含むスルーシングが左枝条件に関してどのように振る舞うかを検討し、その諸

性質を整理することを試みる。そのうえで、そのようなスルーシングに対する分析が島の修復現象にどのような理論的含意をもつかを論じる。

F室(11月10日午後)

「モダリティ研究の広がり—主に認知と談話の観点から—」

司会 眞田敬介(札幌学院大学)

モダリティは事柄に対する話し手の捉え方を表す意味的カテゴリーであるが、その捉え方には言語内的意味はもちろん、言語外的意味(コンテキスト)、談話、そして人間の認知のありようなどが重要に関わる。このことから、モダリティを意味論、語用論、認知言語学、機能主義言語学などの観点から迫る研究が活発に進んでいる(澤田 2018[1], Nuyts and Auwera (eds.) 2016[2]など)。これらの理論を採るモダリティ研究事例が蓄積されているが、質的分析や共時的分析に留まらない。大規模電子コーパス(BNC, COCAなど)の利用により量的分析もしやすくなり(Krug 2000[3]など)、文法化、構文化、歴史語用論の研究などの台頭により通時的研究の蓄積も進んでいる(Narrog 2012 [4]など)。

こうした背景を踏まえ、本シンポジウムではモダリティがどのような切り口で研究され、今後どのような研究の広がりを見せうかを、主に英語の現象を分析対象としつつ、認知と談話の観点から考えたい。

[1]『意味解釈の中のモダリティ』開拓社。[2] *The O. Handbook of Modality and Mood*. OUP. [3] *Emerging E. Modals*. Gruyter. [4] *Modality, Subjectivity, and Semantic Change*. OUP.

「英語法助動詞を用いて述べられる事柄の特徴」

講師 長友俊一郎(関西外国語大学)

認知言語学的アプローチからの英語法助動詞分析の一つに、「認知文法」の枠組みによる分析(Langacker (1991[1], 2013[2])など)がある。この分析では、「現存性」(reality)と「非現存性」(irreality)の領域が想定され、法助

動詞の一般的特徴として、法助動詞を含む文の命題内容は、後者に属するとされる。本発表では、この特徴づけでは説明することが難しいと思われる法助動詞の用法のいくつかを挙げてみたい。

認知言語学的概念の一つに「メンタル・スペース」(mental spaces)がある。言語研究においてメンタル・スペースの概念を用いたモダリティやムードの研究の学術的貢献が期待されているが、その研究は非常に少ない(Boogaart and Fortuin (2016:520[3])). 本研究では、法助動詞を(非)現存性との関連ではなく、「(非)確言性」((non-)assertion) (Palmer (2003[4]))との関連で捉え、メンタル・スペースの概念を援用した法助動詞の特徴づけを提出してみたい。

[1] *Foundation of Cognitive Grammar (Vol. II)* [2] “Modals: Striving for Control” [3] “Modality and Mood in Cognitive Linguistics and Construction Grammars” [4] “Modality in English”

「根源的 must のさらなる使用依拠的研究に向けて—周辺部に生起する評言節 I must say の談話機能分析—

講師 眞田敬介 (札幌学院大学)

must を含むいわゆる真正法助動詞の使用頻度が減っているという観察がある(Leech 2003[1]). shall が Shall I ~? や Shall we ~? などで使用されることが多くなったのと同様に、must (以下、根源的用法に限定)にも生起しやすい言語環境(構文、使用域など)があるのではないか。その研究によって、話者が must を使う際に持つ言語知識(Taylor 2012[2])の一端に迫ることが本発表の大きな狙いである。

具体的には、評言節 (Brinton 2008[3]など)としての使用が定着している I must say に着目する(例: it's an honor to be in with all the other nominees, I must say)。現代アメリカ英語コーパス(COCA)からデータを収集し、その使用実態(主に生起位置)や機能に周辺部研究(Beeching and Detges 2014[4]など)の枠組みから迫る。Beeching and Detges (2014: 11)は左周辺部と右周辺部が持つ機能には傾向があるという仮説を提示したが、その仮説に評言節

I must say がどの程度符合するかなどを検討する。

[1] “Modality on the move”. [2] *The Mental Corpus*. OUP. [3] *The Comment Clause in English*. CUP. [4] *Discourse Functions at the Left and Right Periphery*. Brill.

「認識動詞を用いた話し手の態度表明—認識的モダリティと認識的スタンス—

講師 遠藤智子 (東京大学)

自然会話において、I think 等の人称代名詞と思考動詞からなる表現が主節としてではなく話者の認識的態度を標識する部分として働くことはよく知られている(Thompson 2002[1])。会話をデータとして用い、相互行為の中で文法を捉えなおそうという研究潮流において、認識的態度は認識的スタンスと呼ばれ(Englebretson 2007 [2])、I think についても対人的機能を中心に詳細な分析が蓄積されている(Kärkkäinen 2003 [3])。

本発表では、まず意味論的・文法的カテゴリーとしての「モダリティ」と相互行為において表明されるものとしての「スタンス」という二つの概念の共通点と相違点を整理する。そのうえで、特に I think 等の人称代名詞+認識動詞からなる標識に焦点をあて、Santa Barbara Corpus of Spoken American English 等の会話データを用いて具体的な分析を提示する。中国語やドイツ語等における類似の標識についても検討する。

[1] ““Object complements” and conversation”. *Studies in Language*. [2] *Stancetaking in Discourse*. Benjamins. [3] *Epistemic stance in English conversation*. Benjamins.

「モダリティと多機能性—多様な語順を生む副詞の効果—

講師 鈴木大介 (摂南大学)

モダリティを表す副詞は生起位置が自由であり、文頭や文末の他にも Subject と Verb の間あるいは Verb と Complement の間など、様々な位置に登場する(Greenbaum 1969[1], Lenker 2014[2]など)。however のような副詞と同様に、基本的には定まっている英語の語順にヴァリエーションをもたらすのである。さ

らには、疑問文中に生起する例も確認されている。このように、法助動詞とは異なり生起文脈の多様性を備える法副詞を例に、モダリティ研究の広がりや議論していく。

具体的には、*perhaps* を取り上げ、(i)生起位置、(ii)主語、(iii)倒置、(iv)疑問文といった、情報の流れと密接に関わる要因との関係を調査する。その際、主に挿入的用法に着目し、通常の用法と、さらには他の種類の副詞のケースと比較しながら分析していく (Taglicht 1984[3]など)。結果として、法副詞はモダリティの意味を表すだけでなく、談話の流れや話し手と聞き手のやりとりに深く寄与していることが明らかとなった。

[1] *Studies in English Adverbial Usage*. University of Miami Press. [2] “Knitting and splitting information”. [3] *Message and Emphasis: On Focus and Scope in English*. Longman.

G 室 (11 月 10 日午後)

「破格構文・例外的現象から見える言語の一般的特性」

司会 金谷優 (筑波大学)

本シンポジウムは、英語の破格的・周遍的な構文の事例を考察し、そこから見えてくる当該構文の本質を明らかにし、言語体系のより深い理解へとつなげることを目的とする。三野講師は *there* 構文に生じる周遍的な動詞の用法の振る舞いを観察し、構文のプロトタイプという観点から *there* 構文一般の意味と機能の関係を考察する。辻講師は周遍的な動詞の生じる二重目的語構文の特異性について指摘し、特異でありながらも当該構文のプロトタイプと密接につながりがあることを論じる。金谷は *because* が用いられる破格的な構文の特徴を考察し、言語知識の総体としての構文ネットワークの観点から「普通の文」も構文として捉える必要があることを論じる。住吉講師は節接続の破格的・変則的事例をもとに、フレーズ化およびフレーズ化による新たな機能の獲得という点から節接続一般に与えられる示唆を考える。

「一般動詞を伴う *There* 構文の構文論的分析：構文の機能と動詞 (クラス) 特定構文の関わり」

講師 三野貴志 (大阪大学大学院)

there 構文では *be* 動詞が中心的に用いられ、一般動詞を伴う用例は非常に周遍的である (Yaguchi 2017[1])。加えて、存在や出現を表す動詞のみが容認されるように、動詞の意味的制約も厳しい。このような背景のもと、一般動詞の中でも周遍的な動詞、つまり、存在や出現らしくない動詞 (*come, boom, speak* など) の振る舞いを検討する。

本研究では、*there* 構文における具体的な動詞を含む動詞(クラス)特定構文 (Iwata 2008 [2]) の特異な振る舞いを指摘した上で、これらの特異性が *there* 構文の新情報の導入という語用論的機能に動機付けられていることを主張する。つまり、動詞を含む下位構文のレベルだけでなく、*there* 構文全体に共通する抽象的なレベルの情報も重要であり、二つが相互に関わりあっていることを指摘する。

[1] *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach*, 開拓社。 [2] *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, Benjamins.

「win クラスの二重目的語構文の周遍性と一般性について」

講師 辻早代加

(大阪市立大学 (非常勤))

動詞 *win, gain, earn* は、二重目的語構文に生じることができることが知られている。これらの動詞は、これまでは、*get, find, buy* などの二重目的語動詞と同じカテゴリに入れられ、「獲得動詞」と呼ばれてきた (Pinker 1989[1], Goldberg 1995[2])。しかし実例をよく見ると、*win, gain, earn* を用いた二重目的語表現は、*get, find, buy* のような動詞を用いた表現とも、また、その他の二重目的語表現とも、そのふるまいや意味が大きく異なっていることが明らかとなる。

本発表では、まず、主語の性質や描写される状況の違いから、*win, gain, earn* を用いた二重目的語表現の特異性について説明する。その後、これらの動詞が当該構文に現れるプロ

セスには、他の動詞とは異なり、causativization (使役化) が関わることを論じる。また、これらの動詞は獲得動詞として他の動詞と一括りにするのではなく、win クラスと呼ぶべき小さな動詞クラスを独自に形成していると考えられるべきであるということを目指したい。

[1] *Learnability and Cognition: The acquisition of argument structure*, MIT Press. [2] *A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press.

「言語知識としての構文ネットワーク： because 構文を例に」

講師 金谷優 (筑波大学)

本発表では、「文法知識の総体は構文ネットワークである」という仮説 (Goldberg 2003 [1]) を支持する主張を行う。まず、周辺の・破格的な because 構文の事例として、*just because of X doesn't mean Y* 構文 (例: *Just because of his mistake doesn't mean you're going to have lights out.*) および *because X* 構文 (例: *I cannot go out with you today because homework.*) を取り上げ、両構文がともに因果用法の because 節を含む文 (because 因果構文; 例: *The ground is wet because it has rained.*) から情報を継承し、ネットワークが形成されることを確認する。次に、ネットワークの一部に組み込むためには、because 因果構文のような「普通の文」も構文として扱う必要があると主張し、その構文としてのステータスについても論じる (Kanetani 2019 [2])。より巨視的な観点から言えば、本事例研究は「言語知識＝構文知識」という主張 (cf. Hilpert 2014 [3]) へつながる。

[1] “Constructions,” *Trends in Cog. Sci.* 7(5). [2] *Causation and Reasoning Constructions*, Benjamins. [3] *Construction Grammar and Its Application to English*, Edinburgh Univ. Press.

「フレーズ接続副詞としての add to that : 文 接続への示唆」

講師 住吉誠 (関西学院大学)

Greenbaum (1968) では、文と文をある種の意味関係でつなぐ *conjunct* (接合詞) は「閉じた類」と主張されている。しかし、住吉 (2016) でも指摘したように、近年、*not only but*

that のような複数語の固定化した連鎖が新たにフレーズ接続副詞として使用されている実態が確認される。本発表では、次の *add to that* を議論の中心に据える。And add to that, of course, we have Mister Nick Lachey joining us for the second day. (COCA) この *add to that* は成り立ちを考えれば、接続副詞として使用されること自体が変則的である。事例を仔細に観察すると *add to that* には異形が確認される。当該表現と異形のデータをもとに、その形成過程・振る舞いの実態を明らかにし、①フレーズ化と②フレーズ化による新たな機能の獲得というふたつの点から、文接続にどのような一般的示唆を与えることができるかを考える。

[1] Greenbaum, Sydney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman. [2] 住吉 誠 (2016) 『談話のことは2 規範からの解放』, 研究社